幼児の教育　第99巻　第11号　平成12年11月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

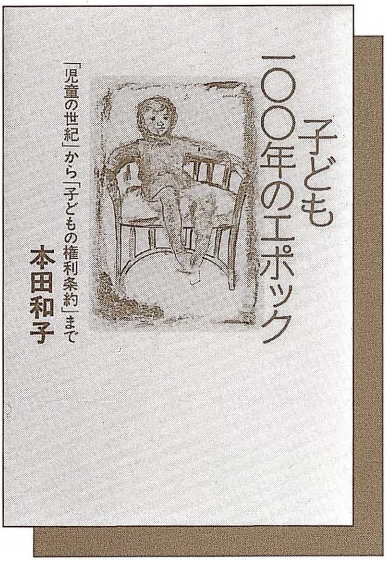
2000／11

第99巻　第11号　日本幼稚園協会

20世紀は子どもにとってどんな100年だったのか。
今世紀の総決算と21世紀の「子ども」を展望した保育者必読の書!!

子ども 100年のエポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで



＊本書は
『幼児の教育』の連載を
もとに
まとめたものです。

【内容】

この100年間の「子ども観」「子ども一大人関係」の変遷をたどりながら、20世紀の「子ども」を総括した一書です。

世紀の終焉期に頻発する子どもの不可解な事件や理解しがたい言動……これらが物語っていることは何なのか、そしてなぜいま私たちは「子ども」が見えなくなってしまっているのか、保育の前提にある「子ども理解」を深めるのに役立ちます。

好評発売中!!

本田和子／著

四六判　280ページ　定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第99巻　第11号

幼児の教育

目次

——第九十九巻　第十一号——

巻頭言　味わいのある保育を求めて……高杉　自子…（4）

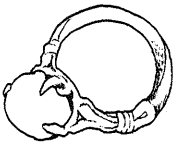
偶然は、必然的にやってくる……田代　和美…（9）

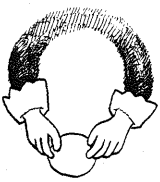
沖縄の保育問題—五歳児保育を中心に—……神里　博武…（18）

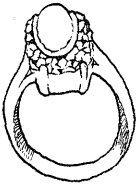
老若男女共同参画社会の子育てを見通す(7)
—近代化の行き詰まりを切り開く子育ての共同—……金田　利子…（25）

子ども時代と私(22)　山の手の原っぱ族……今井　省吾…（36）

© 2000
日本幼稚園協会

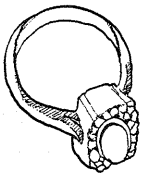






耳をすまして　目をこらして(8)……宮里　暁美…（42）
私が幼児教育を志した頃(13)……津守　真…（44）
子どものいる暮らし―男・夫・父
暮らしの中で子どもを観る私と私を観る子ども……安見　克夫…（54）
子どもの本から　愛の祭り　イースター……大沢　啓子…（60）

表紙絵／田中　千尋
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「ゆびわ」
編集委員／田代　和美・高橋　陽子・桝田正子
編集部／仲　明子



巻頭言

味わいのある保育を求めて

高杉　自子

保育が変わってきたのでは

「主体性というと、活動に取りかかる姿だけを問題にする人が多いが、本当は、子どもが活動を終えた時に、自分の思いがかなったのを確かめ、後々まで思い出しては味わい知って（鑑賞して）いとおしむことができることなのだ」とどなたの言葉だったのかは忘れたが、私は深く心を打たれ納得できた。子どもの自主性とか主体性を問う時、いつも思い出す言葉である。

「子どもは〝味わう〟なんてできるか？」と反論する人もいる。しかし、子ども自身が必死に自分の心身を動かし活動できた実感を得たとき、「味わい知る」行為をし、他者の承認を得ようとする。あるいは何回も手にして満足したり、次の新しい課題を求めて行動しはじめたりする。こうして子どもの活動は続いていくのだと気づかされた。

長い間私は、さまざまな保育現場をみてきたのだが、この頃気になることの一つにこの〝味わい知る〟

喜びをもたらす保育が減少してきたように思う。一方では、保育を語り合う時に、自発性とか主体性、自主的などの言葉は、ごく当たり前のこととして押さえられるようになった。ただ、保育の姿の中で、子どもと保育者が共にじっくりと活動に取り組み、心豊かな味わいを共有するような光景にはあまり出会わないのだ。なぜ？　どうしてなのか？〝保育の味〟〝味のある保育〟とは程遠く、その代わり、型はめ、通り一遍の保育一色になり、大きな声で唱えさせ、揃った行為をさせて教師が安心する保育、お互いの関係が見えない保育が気になる。

子どもの生活の変化

原因を探れば、人間としての基本的生活が崩壊しつつある。例えば、家族バラバラに食事や睡眠をとるホテル家族とか、家に閉じこもり長時間テレビやテレビゲームに時間を奪われる子どもとか、あるいは、親の生活リズムに振り廻され、夜型の生活に変化し、昼間はボーッとして活動意欲も食欲もわかない子ども達に疑問も持たず子育て機能を失いつつある家庭が増加している。一方「学級崩壊」や不登校生が増加している学校は、その現象に振り廻され、人間が育ち合い学び合う場という本質の自覚から遠のいていくような気がしてならない。しかし焦るばかりでは解決できない。

新しい提言を受けて

今回〝幼児教育の充実に向けて〟―新しい時代の幼稚園教育を実現するための施策提言―（中間報告）平成十二年七月二十四日、幼児教育の振興に関する調査研究協力者会合でまとめたものが文部省から発表された。

毎日のニュースを見るのが怖いような、全く思いがけない犯罪や事件を少年だけでなく、親たる大人も起こす情けない現状の危機や少子化傾向に、新しい世紀に向けての教育の見直しの必要に答えたのであろうか。幼児期の重要性を社会全般に訴え、家庭や地域、

そして幼児の集団施設保育、学校教育が一丸となって子育て支援活動を充実し、新しい時代の幼稚園教育が実現できるような施策の必要を訴え教育予算の獲得を内容としたものと思われる。今回その提言にふれながら現場の受けとめ方について考えていきたい。現場ではこのような提言は言葉だけが一人歩きをする傾向がある。例えば「生きる力」の必要が叫ばれた時は、習字の時間に書かせて掲示板一杯にした小学校を見て呆れたことがある。「生きる力」「心の教育」と研究会で取りあげられても現状は依然として変わらない。むしろ、問題化は進行するばかりのようだ。こうした現状は文部省の方針に従い言葉遊びに終わってしまうのだ。これでよいか「一人一人を大切に」「豊かな心を育てる」という言葉を唱えていれば、実践している錯覚に陥るのかもしれないと思う。現場は「実践の宝庫」なのである。実践こそ強みである。現場は、それぞれの園の実態をふまえ、その園の実情に合わせて内容や方法を工夫することができる。他者のモデルは参考になっても自園の実情には合わない。〃現実を直視し、問題と課題を見出し、それを解決するための方策を練って実践する〃。足元から、出来ることから一つ一つ取り組み検討を重ね、地道で丁寧な取り組みが変化を齎(もたら)すのだ。実践の検討を一人よがりにならないようにするためには、何人かで語り合うことである。視点が多様になるのだ。但し、一人一人が自分のこととして考え、自分の主張をもつことが基本的には必要である。

「ティーム保育」の導入

このようなことに関連して今回の提言では次のように述べている。

新幼稚園教育要領の実践化を図るためには〃幼稚園全体の協力体制を高め、きめ細かい指導の工夫を図ることが必要となり複数の教師が協同で保育にあたる

「ティーム保育」の導入が不可欠〟と強調されている。以前から幼稚園では複数担任制を導入しているところも多いが、単に物理的な問題としてとらえないことが肝要である。実際には、大変難しい問題が潜んでいる。筆者も三十数年前に経験したが、学級王国、担任根性を捨て、互いに先輩後輩の力関係を固定せず、子ども一人一人のより深き理解と必要な援助を求めるための努力へ徹することなのである。簡単な言葉で言えば、ティームを組む教師は互いに気が合い、通じ合い、委ね合うことができる信頼関係が築かれなければできない仕事なのだ。お互いに尊重し合い、指摘されたことは素直に受け止め自らの糧とし、他者から学び視野を広め、善さや真実を大切にし、幼児側に立って考えることを第一義として選択するトレーニングをして、自分づくりに励んでいこうというのである。その姿勢が根底になければ形骸化し、逃避や閉鎖の道を辿ることになる。お互いにどんなに助けられるかに気づき発見や子どもの成長の喜びを共有できれば保育は楽しくなる。教師の協力する姿は、子どもに協力の大切さを生活の中で自然に伝えることができる。報告書に教師の資質向上も合わせて書かれていることに着目すべきであろう。

「幼稚園と小学校の連携推進」について

私ごとで恐縮だが筆者は学芸大学附属校に就任し、学校の方針で小学校教員を振り出しに、幼・小を往来させられ、その間に幼稚園教育の魅力にほだされて遂に自分の意志で一生の仕事に幼児教育を選んだ経歴を持っている。

だから幼小関連を自分の研究テーマにしようと思った。ところが都教育委員会で幼小の関連をさえぎる壁の厚さに根負けしたのが偽らざる本音である。小学校教師の仕事は自分の担当学年の授業で精一杯で保育のことを幼小で話し合う時間がとれない。まして学校と幼稚園の交流も様々な方法で私は四十年前から試みてきた。職員会議も研究会も行事も一緒だったが、小学

校側が小学校の学年関係と同じような意識で共にしようとするまで七年かかった。今回の報告書の意図は有難いが、幼稚園が小学校への片想い、小学校側が理解をもつのは至難のわざである。教員免許併有の機会の拡大の推進は大切なことだが今の情勢だと小学校的幼稚園が蔓延し幼児期の特性は不理解で終わり、心配になる。

行政は幼稚園だけに連携を求め小学校側への働きかけが消極的な気がする。結局、表面的な連携で強者が弱者へ要求する形だけに終わらないか。幼四歳～六年生まで八年間続けて担任した私が発達観、子ども観、教育観などの筋がとおるまでには随分時間が必要だったことを述懐する。

幼稚園と保育所の連携の推進について

幼稚園と保育所は同じ幼児期の子ども達の集団施設教育である。当然双方の連携とはいうが保育の内容・方法についての共通理解が必要である。施設機能は異なるために、今までは連携がとれていたところは少なかった。今回の報告にもある通り、施設の共用化等や教員と保育士の合同研修や、子育て支援事業の連携実施、行事の合同化、情報交換等々の例が挙げられているが当然大切なことだと思う。この問題でも〝○○をする〟ということよりも、どのような気持ちを持ち心を開いて合同で行うことができるかが問題なのである。お互いのよさに気づき、わけへだてなく交流し合う関係づくりに励むための親の意識改革こそ大切ではないか。紙面の都合上子育て支援の問題にふれかねたが、これこそ地域ぐるみの振興に向け、具体的に目的、理由、内容方法を地域の実情を踏まえ身近なことからじっくりとていねいに紡いでいくことが大切である。何れにしても〝味わい深い濃密な保育を子どもと共に創造していく〟ことこそ課題なのだ。そのためには教師一人一人の情熱とエネルギーが必要である。

（子どもと保育総合研究所）

偶然は、必然的にやってくる

田代　和美

その1　本誌の四月号に、大人がお膳立てをすることに歯がゆい思いをしているように見える子どものことを書いた。何か自分の力でやりたい。でも日々の生活の中ではやらされることばかりと感じて、もやもやしていたMは、もやもやして生活したまま、十一歳の誕生日を迎えようとしていた。誕生日プレゼントに欲しい物は特にない。この欲しい物がないということ自体が今の子ども達のつまらなさを象徴しているのだろうが、ここではそれはそれとして置いておく。欲しいものは実はあって、でも物ではなく犬である。小さい頃から生き物が大好きで、とにかく様々な生き物が家の中に持ち込まれてきた。しかし喘息の持病がある妹の誕生で、ハムスターも里子に出されてしまった。犬以外には、欲し

い物はないというのが本当のところであった。こちらとしてもいらない物をプレゼントしても仕方ないなあと思いながら「誕生日プレゼントに目覚まし時計買ってあげようか」と何気なく思いつきで言った。以前に怪獣ブースカの目覚まし時計を欲しがっていたのを思い出していたのである。

子ども達と一緒に時計屋に行ってみると、ブースカの目覚ましはなかったが、歌を歌ったり、話をしたり様々な目覚まし時計があり、ひとつひとつ鳴らしてみては、大笑いだった。そんな中で一番受けたのが、志村けんのバカ殿の目覚ましで、「アイ～ン、アイ～ン、アイ～ン、アイ～ン」と言う声がして、止めると「怒っちゃや～よ」と言うのである。変なのと言わんばかりの物だが、子ども達には大受けだった。本人は「いらない」と言っていたが、結局その変な目覚まし時計を、誕生日プレゼントした。Mは「いらないって言ったのにー」と嬉しいんだか何だか分からない反応だった。むしろ妹の方が喜んでいた。

明日から起こさないという意味で目覚まし時計をプレゼントしたのではない。そういう言葉も一度も言っていない。しかし次の日からその「アイ～ン、アイ～ン」で自分で起きる一日が始まるようになった。三日坊主かなと思っていたのが、大した音量でもないのに、連日自分で起きてくるようになった。しかし、本人は毎日、ブーブー文句を言っていた。「あの声を聞きたくないから、早く目が覚めちゃう」とか、「夜中に何度も目が覚めて眠れない」とか、「寝不足だ」とか。「そ～う、大変ねえ」と、そのことに関してはあまりまともに対応していなかった。本当に寝不足だったら見ていて分かるだろうと思っていた

からだ。それにこちらが命令した訳ではない。プレゼントに買ったという事実がそれを命令したことになるという解釈も成り立つが、そんなに素直に親の命令を聞く子どもではない。とにかくそんな文句を言う日々が二週間くらい続いただろうか、しかしそれもいつのまにか言わなくなった。

本人にとってはつらい日々だったのだろう。実際に眠っているかいないかはともかくとして、起きるということと一緒に眠るということ自体が、大きなテーマになっていた日々だったのだろう。でもそんな日々の中で、大きな変化が起きていた。自分で起きるということを自分に課してから、早く寝なくちゃという意識が働き始めた。それまでは、何をするにも気力がないという感じで、寝る時間になってから宿題を始めたりしてずるずると寝るのも遅くなり、「早く寝なさい」とこちらが言わない日がなかった。しかし自分で起きることが始点になると、何時には寝ようという逆算が始まる。その逆算が、一日の生活を自分で割り振ったり、コントロールする行為につながっていった。私は私で、それまでの日々では、だらだらとした姿を見ると命令や怒る言葉がどうしても口をついてしまっていたが、言わなくてすむようになっていた。そして自分の一日の生活を自分でコントロールしているという実感を持つことによって、Mは自分の生活の主人公になっていった。これは家を越えて学校の生活の中にも大きな影響を与えた。学校の日々が変わったわけではないが、やめようかなとかいっていた部活動を、「ちょっと考えてやめないことにした」り、今まで溜まりに溜めていた学校のドリルをどんどん進めたり、積極的な動きをし始めたの

である。

誕生日のプレゼントに目覚まし時計を買ってあげようと思ったとき、こういう変化を全く想定していなかった。でも何で目覚ましを買ってあげようと思ったのだろう。何も言葉でくくれるようなはっきりした意識はあのときなかった。ただ直感的に思いついたという感じだった。でも後から考えてみると、文句を言っては自己嫌悪に陥ったり、それによって子ども共々悪循環にはまったりしながら過ごしていた日々の中で、子どものしんどさを感じ続け、自分もしんどくて、でもこうすればよいということも見つからずに、どこかに突破口はないかなあと探し求め続けていたのは事実である。そしてM自身が最も、何かのきっかけを求めていたのだろう。一言で言ってしまえば機が熟していたのだろうが、タイミングが合うということには、そうそう出会えるものではない。

子どもが育つ過程の節目には、停滞や後退してしまうことに何度もぶつかる。そういう出口の見えないような中で、今、こういうことがしんどいんだろうなと感じながら一緒に過ごすことそのものが大切なのではないかと思えるようになってきた。それをそのまま感じているだけでは意味がないのかもしれないが、でも一緒に過ごしている人間としては、きっと自分の中に様々な感情が湧いてきてそれを見つめなくてはならなかったり、それによって何かを投げかけたりも自然としてしまうだろう。そんな中で、あれっと思うような偶然の出来事が、事態の突破口になったりする。意識的にしたのではないという点では偶然の出来事なのだろうが、もやもやを共にしてなかったら決して生じなかった偶然なのだ

思うと、それは必然的なことに思えてくる。

その2　Mが犬を飼いたがっていたことを先に書いたが、これは長年の希望だった。あまりに多くの家で飼っているので説得力はないが、ここでは犬は飼ってはならないことになっているということで、そして自分の身の回りのことができるようにならないと生き物の世話は出来ないという事でこの件は先延ばしにしてきた。それに妹の喘息のことも勿論あった。犬の話は毎日のように出て、こちらはこちらで勝手に、部屋をきれいに片づける、言われなくても自分のことを自分でやるなど、Mには越えられそうにないと思うハードルを交換条件に出していた。

そして困ったことが生じた。自分で起きる生活をし始めたMは、それまでこちらが越えられないと思っていたハードルを一つひとつ越えてしまったのだ。Kの喘息のことは未解決のままだったし、それはMも理解はしていたが。父親は、これはもう真剣に犬のことを考える必要があると感じて、Mと一緒に動き始めた。それまでも小さい頃からペットショップが大好きでよく父親と行っていたが、今やインターネット上でも犬を売買しており、二人でいろいろと情報を集めていた。それはそれで楽しい時間だったようだ。しかしペット業界は、育児産業のようだ。お犬様々という感じである。そして何十万というお金で犬が売られている。その矛盾を感じ、またM自身、犬に関する本をいろいろ読んでいたこともあって、捨てられた犬を引き取るという方向に話は進んでいった。しかし、愛護団

体などで具体的に話を聞いてみると、そういう犬を育てることは難しく、初めて飼う人、子どもには勧められないということだった。話は振り出しに戻り、結局、梅雨の時期をKが乗り越えられたら、夏休みに柴の子犬を飼う約束になった。

ところが五月半ばの週末、買い物に出かけた駅前で動物実験に反対する団体がパネル展をしていて、私達は吸い寄せられるようにそこに行ってしまった。そしてそこには、里親を探しているという一匹の犬がいてしまった。数日前に保健所で殺されているはずの犬だった。お世辞にもかわいいとは言えない茶色に黒が混ざった犬で甲斐犬の血を引くので「カイ君」と名付けられていた。私が買い物をし、父親がKと遊んでいるその間ずっと、Mはカイ君の所にいた。しかしそれまでの経緯で、そういう犬を飼うことは難しいと言われていたため、後ろ髪を引かれながらも、募金をし、パンフレットをもらってそこを後にした。帰宅した後も翌朝も、Mは「カイ君、どうしたかなあ」とそればかりだった。実はそれは私も同じだった。「柴犬とカイ君どっちがいいの？」と聞いてはならないことを聞いてしまった。「そりゃあ、カイ君」。当然だ。その日、私はもらったパンフレットを手に、その団体の本部に電話をかけ、昨日会った人たちを探してもらっていた。里親が見つかっていることを祈りながら、かつ見つかっていなかったらどうするというのだろう、自分のやっていることは支離滅裂だと思いながら。あの犬を見捨てて、お金で犬を買うということは、Mに何を伝えるのだろうか。私が引っかかっていたのはそのことだった。後に連絡がきて、やはり里親は見つかっていなかった。父親は私が連絡を取ることも見通して

いたようで「昨日連れて帰るのかなあと思ってた。Mらしい選択じゃないか」と当然のことのように言った。

様々な矛盾を抱えつつ、カイ君が我が家にやってきた。推定年齢三歳くらいの成犬だ。そして来て直ぐに、Kに噛みついた。怪我はなかったが、先制攻撃に不安が増大した。あのとき見たカイ君はあまりにおとなしく、難しさのかけらすら見られなかったのに。Mは登校する前に散歩に行くため、我が家でもっとも早く起きる人になった。朝夕の散歩を一日も欠かさずに行き続けている（朝は父親も起きれば一緒だが）。Mは一度咬まれ、破傷風の予防接種を受けたが、その日も夕方も何事もなかったように散歩に行った。

カイ君との日々は楽しくて仕方ないようだったし、とてもなついてはいたのだが、段々と言われていた難しさが表面化してきた。外で飼っているため、家族の者以外には番犬として吠えまくる。子どもも嫌いだ。犬の本能としては当たり前のことが、飼うとなると問題になる。そして家族以外の人や犬に一度吠え始めると、本能のままになってしまうようで、こちらの制止が効かない。制止すると飼い主にも牙をむき、父親も私も咬まれている。おばあちゃんも靴の上からだが、咬まれた。

何かが起きる度に、もうだめかなあとみんなで落胆する。何であの時カイ君に出会ってしまったんだろうと後悔もしてしまう。団体の方に何度も電話で相談したり、犬を飼っている方々からもいろいろ教えてもらってきた。結局は子どもが飼い主であること自体、なめてかかることになるから、家族全員で父親を群のリーダーとして飼い、自分がその中の

一番下という位置づけを徹底させなくてはならないのだそうだ。手放すか、徹底してしつけなおすか。Mは自分が主な飼い主でなくなる事自体、不本意であったようだが、でも手放すという選択はできなかった。Kも一人で近寄ることを禁じられているし、ほとんどさわったこともないのに「カイ君は、私の友達。いなくなったらイヤ」と主張した。ここまで来て、それでも手放さないとなると父親は大変だ。責任重大である。はっきり言って本能しかない状態になった時のカイは怖い。人に向かっていかないように短く綱を持っていて、何とか我慢させていても、我慢の限度を越えると「放せー」とばかりに噛みつこうとする。初めての時はしばらく震えが止まらなかった。父親とて同じだという。生まれてからどんな生活をしてきた犬なのか、全く分からない。でも人間とよい関係を築いてきたとは到底思えない。大人になってから、それを教えていくことがどんなに難しいかを痛感する。

でも手放す選択肢がなくなったことで、父親ほどではないものの、私も腹が据わってはきた。今までも対決してきたつもりではいたが、怖いとも思っていたし、もうだめかなあとか、違う所（があるかどうかは分からないが）で暮らした方がカイにとって幸せなのではないかと迷いがあった。それがどこか伝わっていた様な気がするし、本当の対決になってはいなかったのだろう。でもそんなこと言っていられないとなると、牙をむく相手に「咬むんなら咬んでみなさい！」と向かっていけるようになってきた（怖いのは本当はまだ怖いのだが）。つい先日は、「放せ！」と私の手を咬もうとしたカイが、伺い見るように

私の目を見ていた。時々、思春期の、特に男の子を持つ親の気分ってこんなものかもしれないと思うことがある。MやKがこの先迎えるであろう日々の予行演習のような気分でもある。

私は実は犬が好きなわけではなかった。小さい頃、じゃれてきた犬に押し倒され、下敷きになってからは、特に大きな犬は怖かった。しかしMの影響で否応なしに身近な犬達ともかかわらざるを得ない状況になってはいた。そしてMを通していろいろ話を聞いてきた中で、絶対服従させる関係をつくることは、私にとって恐らくもっとも苦手だという予感があった。そういう関係を持つことを拒んでいる自分があった。自分の目指す子どもとの関係と矛盾する関係を作る自信はなかった。拒んだままでいた方が楽だったろうが、偶然にもカイというとんでもない犬がやって来たことによって、拒むことができなくなった。私には〝その1〟のような偶然に立ち会う自信は少しはあるかもしれないが、〝その2〟のようなたじろがずに対決する自信がなかったのだろう。それを思うとカイとの出会いも偶然ではあったが、苦手ではありながら必要感も感じてきた関係を身に引き受けることは、自分にとって必然的にやってきたことのように思えてくる。自分の中の知らなかったもう一つの顔が見え始めていて、それは結構面白い。

（お茶の水女子大学）

沖縄の保育問題

―五歳児保育を中心に―

神里　博武

文部省・学校基本調査報告書によると、平成一一年五月一日現在の沖縄県の五歳児の幼稚園就園率（小学校第一学年児童数に対する幼稚園終了者数の比率）は八五・一パーセントで、全国平均の六一・六パーセントを大きく上回り、全国でも群を抜いて高くなっている。この数字が、保育に欠けない児童の幼稚園就園率であれば問題はないが、親の就労等で日中保育に欠ける児童も五歳になるとほとんどが保育所を退所し、公立（市町村立）幼稚園に入園するというのが、一般的に行われている沖縄の保育の現状である。なお沖縄には公私立あわせて二七四園の幼稚園があるが、そのうち公立が二四四園（八九

パーセント）で、全ての小学校区に公立幼稚園が設置されている。保育所は三二六園で公立が一六五園（五〇・六パーセント）、法人立が一六一園（四九・四パーセント）である。

平成九年に筆者が行った五歳児保育実施状況調査では保育所に入所している四歳児が、三、四五八人、五歳児が四一三人であるので、単純に計算して保育所には一割程度（一一・九パーセント）の五歳児しか残らないことになる。このように五歳になると保育所入所児の九割程度は保育に欠けた状態のまま、幼稚園に入園するか、祖父母等に預けるか、中にはいわゆる「カギっ子」として放置されることになる。

このような状況が長期にわたって行われてきたのは、戦後の沖縄の米国統治下における保育・幼児教育政策の産物であり、沖縄の保育政策の貧困の現れであるといえよう。今回は五歳児保育問題を通して沖縄の保育の現状を紹介し、五歳児保育問題が出てきた歴史的背景、経過については次回に報告する。

保育所での五歳児保育の実施状況

平成九年に実施した五歳児保育の実施状況調査によると五歳児保育を実施している市町村は四割程度で、保育所は三割程度である。公私別には公立が二三パーセント、私立（法人立）が四〇・四パーセントで私立が高い。

保育所の規模別に五歳児保育の実施状況をみると、「六〇人未満」が一二・九パーセント、「六〇～九〇人」が三二・一パーセント、「九〇～一二〇人」が四二・九パーセント、「一二〇人

以上」が五八・三パーセントとなっていて、規模の大きい保育所ほど実施率は高くなっている。これは、五歳児保育による四歳児以下の児童への影響や保育所運営（経営）上の影響が比較的少ないこと、五歳児の集団保育が可能になる等のメリットがあるためである。沖縄の保育所は小規模園が多く、定員六〇人以下の保育所が七六パーセントを占めている。

市町村の五歳児保育を実施している理由は、「保護者や保育所の要望を受け入れて」が最も多く、次いで「五歳児保育は児童福祉法でも保障されているから」が多い。保育所でも、「保護者の要望を受け入れて」が最も多く、次いで「五歳児保育の重要性を認識しているから」が多い。

保育所が五歳児保育を実施しない理由としては、「希望者がいない（少ない）」が最も多く、次いで「施設が整備されていないので」となっている。希望者がいない（少ない）理由を見ると、「ほとんど全員が幼稚園に行っている」ことをあげている。そのことについてある保育園長は次のように述べている。「今年も二人希望者がいましたが、人数が少ないということと、沖縄の慣習で迷ったらしいが幼稚園に移った」、「希望があれば一〇人までの枠で入所出来るようになっているが、現在はいない。四月に二人の親の希望があったが、子どもがどうしてもみんなと同じように幼稚園へ行きたいとのことで、幼稚園へ入園した」と言うように、殆ど幼稚園にいく為に保育所希望者がいない。その他に、「四歳児、五歳児の混合クラスになった場合、担任の負担が大きい。施設の整備がされていない」、「幼稚園での保育が根付いている。」等が上げられる。

五歳児保育を実施している保育所での五歳児の在園状況を見ると、平均が七名で、四名以下が四三・八パーセント、二名以下が二〇・三パーセントを占

めている。このように、五歳児保育を実施しているといっても、半数程度の保育所では四、五名以下しか残らないので、やむなく四歳児との混合保育をしているといった状況である。

五歳児の集団保育を保障するために沖縄県中部のU市では、公立保育所の場合二ケ所の大型保育所で五歳児保育を実施している。これは五歳児の集団活動は保障されるが、一年間だけ新しい環境での保育をするといった問題点もある。

幼稚園降園後の五歳児の状況

児童は、幼稚園降園後、学童保育を利用したり、外で友達と遊んだり、子どもだけで家の中で遊んだり、祖母等身内の人のもとで生活している。

保育に欠ける児童でも五歳になるとほとんどが公立幼稚園に行くために、幼稚園降園後の午後の生活をどのように保障するかが大きな課題である。その受け皿として沖縄では幼稚園児のための学童保育が盛んに行われている。お昼前になると学童保育の迎えの車が公立幼稚園の前に待機している光景が日常的に見られる。「学童保育を利用している」児童のいる幼稚園が七六・一パーセント、「祖母等身内の人が見ている」児童のいる幼稚園が六二・七パーセント、「カギっ子になっている」児童のいる幼稚園が四一・八パーセント、となっている。「その他」が九・七パーセントで「幼稚園での預かり保育を利用」、「幼稚園や児童館で遊んでいる」等となっている。

「学童保育を利用している」児童のいる幼稚園における一園あたりの平均学童児童数は一九人で最低が一人、最高が五一人となっている。「カギっ子になっている」児童のいる幼稚園の平均は三人、最低は一人、最高は一〇人となっている。沖縄で保育に欠ける五歳児が幼稚園に就園しているのは、午後の

生活は学童保育に依存しているところが大きいからである。公立幼稚園―学童保育がセットになって、五歳児の保育が成り立っているのが沖縄の現状である。その為に幼稚園現場から学童に対する期待は大きい。ある教諭は「降園後、学童にお世話になっている子ども達の様子から幼稚園での活動内容が学童でも重複しては真の保育とは思えない。降園児を『おかえりなさい』と暖かく迎える家庭的雰囲気の場である学童を望む」と注文をつけている。幼稚園降園後カギっ子になる児童について、ある保育所長はその状況を次のように述べている。「午後から子供のみで過ごす状況も多いようで、商店街（ゲーム機）、スーパー等で遊んでいる子どもを見受ける」、「両親共働き家庭で、盗み、火遊び等で親から相談があった」。

五歳児保育についての保護者の意識

保育所で五歳児も保育しており、保育所から小学校に入学できるということを知っている保護者が近年、増えていて八割を越えている。また、五歳児にとって必要な保育施設として保育所をあげる保護者が三分の一を越えている等、意識として大きく変化を見せている。しかし、実際に五歳児保育のために保育所を選択する保護者は少なく、行動化するまでに意識は深まっていない。沖縄市の平成九年度調査によって保護者の情報源をみると、知人・友人が最も多く四七・八パーセント。次いで保育所の保育士が四〇・八パーセントで高く、役所の窓口は四・八パーセントと最も低い。このように五歳児保育の情報は市町村窓口からはほとんど得られておらず、主に知人・友人、

保育士からである。行政が住民に対して五歳児保育についての情報を提供しないのは、行政側の五歳児保育に対する姿勢を示していると同時に、沖縄の保育行政の貧困に由来するところでもある。沖縄の現状から見て行政としては待機児の多い低年齢児の入所を優先せざるを得ないからであろう。

保育所で五歳児保育を実施して良かった点と問題点

保育所で五歳児保育を実施して良かった点としては、五歳児が年長児としての自覚を持ち、リーダーシップを発揮していること、異年齢交流を通して年長児としての意識が芽生え自信を持つと共に思いやりの気持ちが出てきたこと。一貫性のある乳幼児保育が出来たこと。子どもの発達がよく理解できたこと。就学を見通しての保育が出来たこと。親の就労を保障したこと。地域のニーズに応えた保育が出来たこと。等があげられる。五歳児保育を実施している現場の代表的な声を一つ紹介する。「異年齢交流の中で、五歳児は年長者として、みんな（年中、年少児）のお手本であり、あこがれである。保育所ならではの縦の活動が出来る。五歳児は年少児の世話を当番活動等を通して、思いやり、自信、生活の知恵がついた」。

五歳児保育の問題点としては、五歳児が少ないために四歳児との混合保育となり五歳児に合わせた五歳児だけの集団が作れない。五歳児保育に必要な部屋、備品、教材、保母の配置が不十分である。定員内での五歳児の受け入れなので、その分、年少、年中児に影響する。又、六〇人定員の場合、人件費等で運営上の問題が大きい。等があげられる。

ある保育所長は次のような事例を紹介してくれた。「五歳児だけの部屋がない、保母がいないので、四、五歳児クラスとなったが、特に四月には五歳児

が残されてしまったという思いで落ち込み、そんな子ども達を勇気づけ自信を持たせることに気を使った」。保育所を希望していた保護者が、五歳児の部屋がない、保母がいない、混合クラスということを聞いて、幼稚園に入園させたケースもある。年によって児童数に変動があり、何名残るのかわからない不安定さの中で五歳児保育は行われている。

今後の課題

現在の保育制度は、一時保育、預かり保育等が制度化されているとはいえ、基本的には保育に欠ける児童は保育所、そうでない児童は幼稚園という二つの選択肢しか準備されていない。その為、保育に欠けない児童は保育所に入所できないし、保育に欠ける児童が幼稚園を選択すると、今沖縄で問題になっているように二重保育か午後は保育に欠ける状態が生み出されるといったことが起こってくる。親や児童の選択権を保障していくためには、選択できるだけの条件整備が必要である。

そのために、全ての保育所で五歳児保育が取り組めるような条件整備と保護者、保育者、行政担当者の意識改革をすすめ、保育所での五歳児保育の質をより豊かにするといった課題に取り組むことが必要である。またどのような地域にも（公立）幼稚園が整備されているという条件と、自治（字）公民館、地域組織等を生かした沖縄独特の五歳児保育のあり方の研究・実践も今後の課題であると考える。当面は、保育所の整備・充実と幼稚園児を含めた学童保育（放課後児童健全育成事業）の充実が喫緊の課題である。

（沖縄キリスト教短期大学）

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(7)

―近代化の行き詰まりを切り開く子育ての共同―

競争社会における弱者こそ人間らしい社会づくりへの旗手

金田　利子

はじめに

この連載も隔月で一年余今回で一応の終結となる。連載の期間中に起こったあまりにも厳しい青少年自身の出来事や、親や養育すべき側の「子殺し」も含めた虐待などの報道に接するにつけ、一回目に取り上げた「近代化の行き詰まりの問題」が、ここまできてしまったのかと、社会の完全な崩壊さえ予感され、心を痛めつつ実感している。そして子育ての共同は、支え合う取り組みが近代化の行き詰まりの打開への道（競争社会から共同社会へ）につながり、社会崩壊をくいとめる力になるのではないかという思いを強くしている。言い換えれば、個々人の生活レベルでの困難への支援への取り組みが、むしろ病んだ社会の治療を支援

する大きな力につながっていくのではないか、またそうなる可能性を孕んでいるのではないかと。

本連載では、子育ての共同は、こうした可能性を自覚し、その方向をめざしてこそ意味を持つのではないか、という一回目の基調提案をもとに、二回目以降、いくつかの角度から何人かの方々に協力執筆を頂いた。

そこで最終回にあたる今回は、近代化の行き詰まりを切り開く子育ての共同とは何かを、これまでの連載をふまえてもう一度確かめておきたい。また、子育ての共同を推進するための専門職は必要なのか、また、どこでどう養成するのかについて追記するとともに、最後に子育てを担う未来の市民育成について触れる。

近代化の行き詰まりとしての生きにくさ

近代化とその行き詰まりの私自身の捉え方の詳細については、一回目（一九九九年十一月号）に述べているので省略し、ここでは、今日それがどんなふうに表れているかを中心に言及する。ここで近代化の行き詰まりとは極くかいつまんで言えば、十八世紀末の産業革命以来二世紀余りにわたって、世界は工業中心に発展し、合理的に効率的に動いてきた。そうしたなかで、男女の分業思想を前提とし、競争原理を基本として、高齢者や障害者など弱者を排除して効率第一主義的にすすめられていく方向が進行し、その歪みが大きくなり、人間自身の破滅につながりかねない状況をいう。

社会学者の森真一氏は、氏の著書『自己コントロールの檻―感情マネジメント社会の現実―』（講談社二〇〇〇年）の中で、こうした今日の新たな合理化の状況を、アメリカのG・リッツァーの使い始めたもので、社会学の事典にも記載されているという「社会のマクドナルド化」という用語をもとに、解説している。この解説は確かに、如何に今日の社会が病んでいるか、私たちの生きにくさがどこからきているかをよく言いあてており、これとの対比において捉えると子育ての共同の方向を考えやすい。そこで、筆者の理解

したところを要約しておきたい（　）は筆者の追加）。

それは、マクドナルドに代表されるファーストフード・モデルであり、「効率性」「計算可能性」「予測可能性」「テクノロジーによるコントロール」という相互に関連する四つの次元の基本原理からなっている。

第一の「効率性」では、（レジ用機＝受け付け従業員数に合わせた数の列に）並んで商品を手に入れ、食べて片付けて店を出るまでが（全自動的に）客と従業員の行為が無駄なく流れるように工夫されている。

第二の「計算可能性」では、質的なものを数値に置き換えるという特徴がみられる。値段の差以上に量の多そうな「ビックマック」を買うと得したような気にさせる。従業員の労働、商品の提供の速さ、商品の大きさ重さなど、すべてが数量化されている。

第三の「予測可能性」では、商品がマニュアル化されているため、特別にうまくもまずくもないがどこの店でどのメニューを選んでも「あの味」という予測が可能になっている。（没個性を意味すると言えよう）。

第四の「テクノロジーによるコントロール」では、ここでのテクノロジーは、機械や道具だけをいうのではなく、スキル、知識、ルール、規制、手続き、マニュアルが含まれているという。機械化されたキッチンシステムやマニュアルが、製品、従業員、客を、経営者の期待どおりにコントロールすることをいう。

こうした流れに乗っている限りにおいて、今日の社会は生きよいのであるが、この流れに則せない者は、速度が遅く予測を不可能にして列を乱す「困りもの」になり、大人も子どもも生きにくくなる。それゆえ、個人もマクドナルド化していこうとする機制が働く。

それに応えるのが、今日普及され始めている心理学的に開発された「感情の知能」（ＥＱ）だと森氏は批判的に分析する。この能力は、生きにくさにこだわるのでなく、自己の感情を社会に合わせて調整できる能力（ＥＱ）を高め、個人の側をもマクドナルド化して今日の社会に順応する人の育成に役立っていくという。

また、マクドナルドの「成功」のもう一つの効率化

の要因として、従業員の非正社員（パート・アルバイト）化をあげている。そして、社会全体が一つの大きなマクドナルドの店舗のようになりつつあり、「能力主義」や「雇用流動化」が進行している。しかも、新しい合理化には、その不満の解消と積極的適応の上に感情のマネジメントを導入し、人々は、経営者・為政者の望む方向への「自己コントロール」を余儀なくされていくという（書名の由来もここにみられる）。

マクドナルド化社会における福祉・教育行政の根本的な問題

前述のように社会全体がマクドナルド化していく中で、どうしてもそれに乗りたくても乗れない「困った」人たちがいる。それが「社会的弱者」である。機械化された切符売場や改札口でモタモタせざるをえない類の人たちである。それは、高齢者・障害者・その国の言葉に不自由な外国人・幼い子どもそして子連れの親などである。こうした人たちが「困った人」としてではなく、その人権が保障されるように支えるのが、マクドナルド化に象徴される資本主義社会の歪みを修正していく社会福祉行政の課題だといえる。

したがって、福祉は、戦争社会における「赤十字」のように、マクドナルド化社会においてもマクドナルド化を許容してはならない、近代社会の道義であり、競争社会において競争を是としてはならない歯止めではないか。もしそれがなければ競争はエスカレートし、資本主義社会の「道徳」は不毛になり、人間社会は崩壊していく。誰も崩壊を望まないであろうにもかかわらず、今日、政府のすすめる社会福祉基礎構造改革では、規制緩和をし、もともと対等な市民の間で行われた自由契約による競争の論理による市場原理を「自己決定・自己責任」の名のもとに、「社会的弱者」の人権保障にかかわる福祉の世界にまで取り入れていこうとしている。これを根本的な矛盾の一つと考える。

この矛盾の露呈したのが、まさにベビーホテルにおける乳幼児虐待死などの姿ではないかと言えよう。

また、自由競争を原理とする資本主義社会にあってもマクドナルド化を意識的に排除することを社会的ルールとして確立させなければ、社会の存続さえ危ぶまれる事態になることを示しているもう一つ側面が、発達的な考慮である。成長・発達の途上にある子どもの保育・教育に競争の論理は矛盾する。

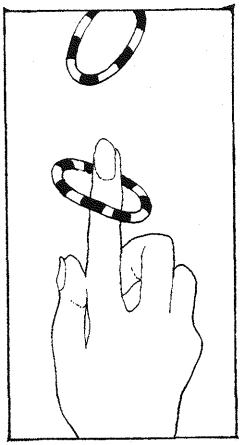
発達には、活動の方向が外に向くときと内に向くときがあるが、後者の場合にはナイーブになる。日常的な行動面では適応できても、内面的にみたとき、もっとも「価値」志向性が高まる思春期―昨今の青少年問題の焦点になっている時期―がそれにあたる。今日の教育行政は、そんなことはおかまいなしに一律にいやむしろ中学校の時期にもっとも厳しく口では「一人一人が大事」と言いながら、マクドナルド化の最たる姿である質を数値に置き換える偏差値教育を進めている。思春期だからこそ、いっそう、それに乗れないにもかかわらず、思春期の最中に高校受験のための順列がつき、しかも内申書という形で人格までもが点数化される。

次の詩は、そのことを如実に物語っている。

ぼくの見た夢　　中三・氏名不明

大きな商店の店先にぼくは並べられていた／　ぼくもぼくのまわりの商品もみんな値段がつけられている／　それは偏差値である／　お客（高等学校）は、数値の高いものから買っていく／　ぼくは売れ残ってなかなか売れない／　店先では売り子（教師）が品物をふいたり並べたりしていた

（都筑学「中学生は自分の将来をどのように考えているのか」　横山・高垣・吉野編著『中学生の発達と教育』三和書房　一九八四年）



こうした、大人たちのつくる社会の矛盾を、言葉で書くことなど、表現の手段を多く持っている場合はよいが、その教育もされてない場合、自傷行為か、反社会的な行動で抗議することになる。後者の場合が十六・十七歳少年の問題につながるのではないだろうか。

マクドナルド化された社会は、人間らしい社会とは呼べないが、競争社会を採るのであれば、社会的弱者や発達的ナイーブ期にある人々には考慮するのが、社会的道義の筈であるのに、それさえなされてないところに今日の福祉・教育行政の根本的問題がみられる。

〝社会的弱者〟こそ人間らしい社会づくりの旗手

ではどうしたらよいか。それには右であげたようなマクドナルド化に乗れない人々が、競争原理の社会から共同原理の社会づくりの方向を導くリーダーとなることが必然になる。社会的弱者や人格発達の敏感期にある者にとって過ごしやすい社会は、すべての人にとっても過ごしやすい筈だからである。

その場の一つが子育ての共同だといえる。さまざまな親がいて、子どもがいる。子どもはそもそも、手塩にかけて育てるもので、マクドナルド化にはなじまない。先に述べたような生きにくい生活環境のなかで、子育て資源が家庭内に少ないときには、多くの場合母だけに子育てが任され、途方に暮れることになる。子どもに障害がある場合などはいっそう厳しい状況になる。それだけに、個人的な努力だけでは楽しいはずの子育てが苦しいものになってしまう。

そこで、子育て支援が必要になる。それには、単に当事者の役に立てばよいというレベルではなく、マクドナルド化に乗れないか乗れても乗りたくない人々（老若男女）がかかわって来られるような方向に、そして市町村自体を住民参加の行政へと発展していくように、「社会的弱者（被抑圧者）」が主人公になり、新たな合理化の進行をくいとめ人間らしい社会づくりに向けて切り拓く拠点の形成が望まれる。これがこれか

らの子育て支援のあり方ではないかと思う。

そうした、これまでの連載でもみてきたように、あちこちで展開されている市民参加の開かれた支援活動の中に、その可能性が内包されている。

第二回の、市の公園づくり計画に、障害児も安心して利用できる公園にしていくようにと設計の段階から市民がかかわり、公園の目の前に住む障害幼児の発達援助の専門家の申し出で自宅を解放してパークセンターをつくり、地域のつながりが育っていった、札幌のむくどりホームの例もその一つである。

第三回の映画〝えんとこ〟を市内全保育園で十月から翌年の二月まで五月雨式に市内各地で上映し市民が膝を突き合わせて鑑賞し、全市会議員の心も動かしたという、焼津市の保育園協会と保護者会連合会を中心とする取り組みもその一つである。これは、障害者がボランティアに世話されながら、むしろその青年たちの生き方に勇気と展望を与えていくという記録映画であるが、感動が町を貫き、いっそう人間らしい街づくりへの道を切り開いてきている。

第四回は、子どもの育ちをタテにつなぐ保育園・幼稚園の役割について取り上げたが、そこで育った子どもたちが、人間らしさとは何かを自然に学びやがて大人になったときマクドナルド化に組みせず、新たな社会づくりをめざす子育ての共同に参与する主体となるであろうことの可能性が示唆された。

第五回は、市民の運動の中で生まれ二〇年の歴史を持つ東村山市の「幼児相談室」を福祉・医療・教育など、そのたてわり行政を越えて発達を支える連携の先進例としてとりあげたが、そこからは市民の声と専門家と行政の連携が人間らしい街づくりに寄与してきている姿がみられた（馬場教子「東村山幼児教室―親子とともに二〇年―」日本児童学会『児童学研究』第七九巻　二〇〇〇年参照）。

第六回は、相対的に支援される側にある親の声を聞き、やがては支援されてきた人たちが支援者になるという親たちの発達の姿について、事例をもとに学ぶこ

とができた。

以上は連載からのまとめであるが、これはほんの一端に過ぎず、マクドナルド社会のなかで、それと方向を異にするこうした実践は数多くなされている。

成長・発達途上の子どもを正式なスタッフとして採用して子どもの考えを取り入れた行政をしていこうとしている川崎市の「川崎子ども・夢・共和国」の取り組み（本誌三月号の編集後記参照）もこれにあたる。

以上のように、マクドナルド化に乗れない社会的弱者や子どもの要求に端を発し、決して同情ではなく、多くの人の課題になっていく展望が見え始めている。誰もが老人にはなるし、いつ障害者にならないともかぎらない。子どもは社会のあすの担い手であり、決して他人ごとではない。同じ社会に生きている以上、生きにくい人の問題は、まさに各自の課題でもある。

このように、「社会的弱者」の課題を自らの課題として対等にかかわる相互支援の輪が大きくなるとき、競争社会ではない老若男女の共同する社会への道に一歩近付いていけるのではないか。つまりマクドナルド化にとっての「困った人」は、人間らしい社会づくりにとってはむしろ「先導的な人」なのだといえよう。そこに「支援」の大きな社会的意義がある。

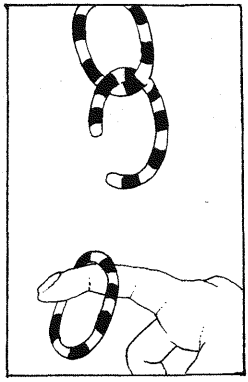
子育ての共同を支える専門職の必要とその養成

子育ての共同は、決して個人的に誰かが誰かを支えるというものではない。公的助成を要求していくことを基本とするが、支援を必要とするものも、単に受け身の存在ではなく、その方向の決定に参画し社会の発展に寄与していくというように、原則としては、長期的見通しの上で、相互支援でありたい。

しかし、そうだからといって、支援をすすめる専門職が不要なわけではない。むしろ、参加者たちが主体的に活動していくことができるように、さり気なく支える人がいるかいないかで、子育ての共同の発展の度合いが決まるといっても過言ではない。

第二回のむくどりホームには、核になる人材の存在があった。小出氏の文を引用する。「この場合は障害児の発達や障害児援助について専門知識を持った柴川さんなのであるが、一人の専門知識をもった人材が最初はボランティアであっても、その力と知恵を提供することによって自治体が動き始める。そして、一人では動かせないがその人を取り巻くボランティアの層があれば、不可能も可能になる。柴川実践においては視聴覚について勉強した女性たちの、女性学級のメンバーたちがグループとしてボランティアを担っていることが非常に大きな役割を果たしている。また、そうして動きだしたところに、他の分野の専門知識を持った者たちが、その立場を越えて援助の手を差し伸べてくることが特徴的である」。

今回の連載には登場してないが、カナダのファミリーリソースセンター（必ず数人のスタッフがいる）にみるような「ドロップイン＝出会いの広場」（小出・伊志嶺・金田共編著『サラダボウルの国・カナダ』ひとなる書房　一九九四年　小出まみ著『地域から生まれる支え合いの子育て』同書房　一九九九年）が、日本においても少しずつできはじめた。そうしたところにおいても、数人の専門職の人たちが活躍している。『子育て広場武蔵野市立０１２３吉祥寺』（柏木・森下共編著　ミネルヴァ書房　一九九七年）では、園長の他に三人のスタッフが活躍している。事業内容の成否はスタッフで決まると考え公募によって慎重に決定したという。個々での活動は、参加した親子が主役であるが、必要なときには相談に乗ったり、黒子となって環境を整えるのがスタッフの大事な役割になる。昨年度より開園の「江東区子ども家庭支援セン



ター」（同センター年報参照）でも同様である。

市民の運動の中でボランティア的にさまざまな子育ての共同の拠点ができていき、公的な場に発展しさらにまた、共同の取り組みが広がるという形で発展していくことにより、人間らしい地域をつくる主体的な場としての意味を持つ。この発展として前述のような施設がこれからもっと増えていくこととが望まれる。

では、こうしたスタッフはどこでどう養成されるのがよいのであろうか。さまざまな方面の専門家同士をつなぎ、主人公である親子同士をつなぎ、専門家と親子をつなぐ、そして遠い見通しを持ちつつ、相談に乗ったり、黒子になって、子育ての共同を方向付けていく、役割を担える人材の育成である。

筆者は以前から、「家政学部」あるいは名称を変えて新たに出発した「生活科学部」において、意識的に養成していけるのではないと考えてきた。

応用科学の学部においては、ほとんどが卒業後の進路が明確（医学部―医者、教育学部―教師、工学部―エンジニアというように）なのに比して、家政や生活科学系にはそれがない。そのことが、勢い、「家政学部―主婦」というような誤解を招く要因になってきたのではないか。もちろん、実際には、食物・被服・住居・保育・生活経営学他それぞれの専門を生かし、より高度な専門職についてきた卒業生たちは多い。しかし、総合科学としての家政学あるいは生活科学の、総合的で実践的という特長を生かしているとは必ずしも言えない。

人々の子育ても含めた生活の支え手としての社会的専門職は、社会科学的かつ自然科学的視野で生活を科学するとともに、健康な生活のための具体的な手立ても持っている生活の総合的な専門家の進むべき進路の一つなのではないかと考えてきた。

おわりに

編集部から昨年の今頃、「子育て支援のこれから」をテーマにした連載をと依頼された。

その、私なりの回答は、今回のまとめに述べたように、今日の社会で弱者（被抑圧者）こそが、社会の担い手になっていくとき、近代化の行き詰まりが打開できるのではないかというものである。子育ては社会にとって重要な活動であるにもかかわらず個人的なことのように、親だけに責任を着せられるとき、子育て中の親もまた弱者の位置になる。とりわけ性別役割分業がなくなっていないなかで、多くは女性にその負担がかかっている。多様な層の人々が弱者の立場で子育ての共同に参加し、公共の子育てへの道を追求していくとき、競争社会から共同社会へその原理を変えていき、子育てが楽しいこととなるような、人間的な生活が可能になるのではないか。そのとき、子どもだけでなく、これまで弱者の位置にあった女性も、高齢者も、障害者も、他民族の人たちも生きやすくなり、そしてこれまで、虐げられる立場にあった場合の男性も、マクドナルド化に乗るのでない、その人らしい個性が発揮できるようになるのではないか。これが二十一世紀への子育て支援の展望ではないかと考える。

最後に、今回は述べ得なかったが、こうした意味で子育ての共同への担い手として、これからの市民の育成に学校教育ではどんなことを基礎として学習していったらよいのかという問題に触れておきたい。筆者は、これを担う中心が、専門家の育成のためではない保育教育すなわち「国民の普通教育としての保育教育」ではないかと考える。それは、これまでは家庭科の保育領域で扱ってきたのであるが、わが子を持つ持たないにかかわらず市民に必要な世代再生産の能力の育成である。それには歴史の方向性を指向しながら「異世代とかかわる力」を育成することが基本だと考えている。この点については、別の機会に展開したいと願っている。

――終――

（静岡大学）

子ども時代と私(22)

山の手の原っぱ族

今井　省吾

私は大正十五年三月生れ、弟二人妹一人の長男で、この年の十月二十五日に昭和と改元されました。私の子ども時代は昭和七年から十三年くらいまでの小学生の頃です。現在に到るまでの私の生活環境の歴史のなかで、子ども時代はどのような種類の環境であったのか。また、私は子ども時代の生活環境をどのようなイメージとして認知しているのか、について述べ、さらに、私の生活史全体のなかでの子ども時代の意識についても少し考えてみます。乳幼児期は五歳まで東京下町育ち、本所相生町に住み、はっきりした記憶はほとんどありません。チンドン屋の後について迷子になり、親が大さわぎで捜したら、両国橋の交番に私が保護され遊んでいたことがあったそうです。小学校入学の少し前、自然の

緑が豊かな山の手の目黒（当時は、荏原郡碑衾村）に引越し、以来七十年間、現在も住み続けています。小学校入学の頃は急速に都市化が進み、新しい住宅が建ち、幼児と児童のいる若い家族が多く移り住む町（目黒区）に変わりました。目黒の競馬場は府中に移転し、広大な跡地がしばらく残され、林業試験場（現、林試の森公園）や田畑、雑木林、雑草の茂った空地（原っぱ）など、子どもにとって戸外の遊び場が豊富にある環境でした。

就学期の子どもの人口が急増したため小学校の教室が足りず、私は古くからある碑（いしぶみ）小学校へ入学の予定が急に変わり、新設の鷹番小学校に通うことになりました。そこでは、校舎がまだ建設中で正常な授業が困難なので、応急処置の二部授業（午前組と午後組）でした。こんな状況のまま小学二年を終えたところで、三年生からは、さらに近くに新設の月光原小学校に移り、二部授業は解消しましたが、ここでも、在学中に新校舎が増築されました。しかし、卒業後しばらくすると、田畑の宅地化も限界で、原っぱも消滅し、住宅の新築も止まり、子どもの数も一定になり、小学校の増築も終了しました。

小学生時代の学校教育の体験のなかで印象の強かったものをいくつか述べてみます。昭和八年十二月二十三日、皇太子（現、天皇）が誕生になり私たち小学生は「皇太子様お生れになあった……」と歌ってお祝をしました。尋常小学校の教科書は全国一律の国定で、私たち大正十五年三月生まれまでは、国語読本は「ハナ、ハト、マメ、マス……」の白黒刷りでしたが、次の学年から四色刷りの「サイタ、

サイタ、サクラガサイタ……」に変わりました。先生による体罰は余りありませんが、授業中のおしゃべりにはチョークが飛んで来たり、教室の外の廊下に立たされたりは、よくありました。冬の暖房は石炭が燃料で、先生は授業中にもときどき石炭をダルマストーブに補給しました。昼食のお弁当を暖ためるために、先生は生徒のアルミやアルマイト製の弁当箱をひとつひとつストーブの上の大きな金網のかごのなかに列べ積みあげてくれました。昼食時間が近づくと、お弁当が適当に暖まり、おいしそうなニオイが教室中に拡がってお腹がぐうぐう鳴りました。四角い弁当箱の中心の梅干の他は全部まわりが白いごはんだけという「日の丸弁当」の日には、先生は、子どもたちの弁当を見てまわり、日の丸を確かめるのが仕事なのですが、全く形式的なチェックでした。実際は、子どもたちの弁当は、日の丸は表面のみせかけで、見えない下の中味の方は海苔やふりかけ、玉子焼などがサンドイッチ状にかくされていたのでした。

クラス編成は定員四十名くらいで、男子組と女子組の編成が一般的で、同学年が三組のときは男子組と女子組に男女組が加わりました。私は男子組でしたが小学校では近隣の地域に住む子どもが集まるので五・六年生になると、同学年の女子組の子の名前と顔もどこの誰ちゃんとたいがい知っていました。けん玉やヨーヨーのような個人技を磨いて競う遊具は学校に持ち込んでも余りきびしく注意されませんでした。しかし、メンコやベーゴマの方は実際に、とったとられたの勝負事なので持込禁止でした。

これまで述べてきたのは小学校の教育環境に関することで私の子ども時代のイメージの序論というべきものです。そして本論の方は友達と戸外の空間で自由に遊んだことです。

学校とは直接関係のない原っぱなどで遊びを中心にした多くの友達との子ども時代の生活は実に楽しい思い出です。グループになって、鬼ごっこ、かく

れんぼ、チャンバラ、探偵ごっこ、凧あげなど思いっきり走りまわり夢中で夕方暗くなるまで遊んでしまいました。グループ遊びの仲間は、年長、同年、年下が一体となったタテ・ヨコ社会で、年長のガキ大将は威張ることもありましたが、グループ全体をとりしきり、年下の仲間ひとりひとりの行動に目を配り、叱ったり、けんかの仲直りをさせたり、面倒見がよくいろいろ教えてくれ、兄貴分のような社会的役割を果し、グループで信頼されていました。ガキ大将出身者の先輩のなかには大戦中に学徒出陣し、特攻機で自爆された方もおられます。私が年下組のときは、年長組との仲間づきあいで鍛えられたり、手かげんされたりを体験するなかで、つきあい方の要領を自然に学習したように思います。

紙芝居のおじさんが拍子木をうちながらやってくると、子どもたちはさわいでいた遊びを一時中止して、「黄金バット」など人気の紙芝居を見に集まり、一銭玉で買った水飴や駄菓子を食べながらおじさんの名調子の語りに聞き入りました。人気のマンガは少年倶楽部などに連載された、のらくろ、タンクタンクロー、冒険ダン吉、日の丸旗之助、蛸の八ちゃんなどで来月号が出るのを待ちわびました。これらのマンガは復刊され、文庫版で、いま見ることができて私にはなつかしいですが、少年時代のあの新鮮な感激やわくわくした期待感は遠い昔のことになりました。

夏はトンボとりの季節です。細長い竹竿の先の方にとりもちをつけ、原っぱや野菜畑のなかで、もち竿をふりながらギンヤンマを追いかけまわし、ついに竿の先にひっつけて捕ったときの快感は何ともいえません。つい、「捕ったい」と大声で叫んでしまいます。トンボを追ってネギ畑のなかを夢中で走りまわると、ネギを踏みつけるたびにポンポンと鳴り、お百姓さんにどなられました。夕暮近く暗くなりかけて密集した蚊をめがけトンボの大群が来襲するときこそ、トンボとりの興奮の最高の場面でメ

チャクチャに竿をふりまわし、このチャンスを逃すまいと無我夢中ですっかり暗くなるまで捕り続けました。

私の子ども時代の昭和初期は、戦前でもまだ食べものや菓子などが豊かで、山の手の原っぱで自由な空間を動きまわって仲間と遊べたので、決して暗い時代のイメージではなかったと思います。

ところで、文芸評論家の奥野健男の説（一九七二年）によりますと、文学者の思想、気質、美意識、作者の内的イメージ、深層意識は、その「風景」や「風土」と密接にかかわりあっていると考えられました。そして、文学者の自己形成空間である故郷の「風土」や文学作品を支える「原風景」が大いに注目されました。奥野自身の原風景は、昭和初期の東京の山の手（えびす付近）の子どもたちの遊び場になった「原っぱ」であるといいます。奥野は、故郷としての「原っぱ」に育った世代の安岡章太郎、吉行淳之介、遠藤周作、山口瞳、江藤淳などに原風景を同じくするなつかしさと同志感を感じ、とくに、北杜夫の「幽霊」や「楡家の人びと」の原っぱの描写を読むと、いいがたい共感をおぼえるといっています。私は昭和初期の子ども時代に「原っぱ族」を体験しているので、奥野の説に全く同感で、「原っぱ族」出身の作家と作品に共感と親近感を感じます。私も同じ「原っぱ族」であることに不思議な因縁を感じています。

少年期から青年期、成人期、現在の老年期へと続くそれぞれの時期には、私にとって強い印象の体験がいろいろあります。

青年期は学校教練、勤労動員、兵隊検査など軍国主義と戦争の時代で、敗戦の放送は気象学徒として中央気象台で職員と整列して聞きました。戦後の混乱期は、自分を改めて見直すため、気象技術者から転身して視野を広くすることを目的として社会人学生になり、人文科学（心理学、文化人類学、社会学）を学び、結局、都立大学で心理学研究者の道を選びました。

心理学では主専攻が実験心理学（知覚、とくに錯視）、副専攻が環境心理学（風土、景観、天候の心理）で、生涯の恩師となった和田陽平先生と辻正三先生に出会い、私の研究領域と方法論は両先生の学風に大きな影響を受けました。直伝的な指導を受けたことはまことにラッキーで、心から感謝するとともに誇りに思っています。私の心理学の仕事四十年間の半ばの時期にシドニー大学へ一年間の海外出張のチャンスがあり、異文化の貴重な体験となりました。以来、海外で多くの素晴らしい友人と出会い、人間味の溢れる国際的交流が続けられてきたことに感謝しています。現在、私は「ひとり暮しの高齢者の自立を支えあう小グループハウスつくり」のボランティア活動をはじめました。ハウスつくり四十五年の英国本部協会と国際的に連動する日本協会の仕事なのですが、ＮＰＯ法人になったばかりで、日本版ハウスの開設は何年先になりますか。きびしいですが、マイペースで楽しみながら仕事したいです。

私の人生の原体験、「原っぱ族」、「社会人学生」「恩師との出会い」、「異文化の体験と国際交流」「ＮＰＯ活動」のうち、子ども時代は「原っぱ族」で仲間と一緒に思う存分遊んだ経験によって、子どもなりに対人関係の適応の仕方を学習し、親から独立して社会人となる芽が育てられた時期であったように思います。

（文博・応用心理士）

目をこらして（8）

母が脳内出血で倒れ、言葉を失った。そのリハビリにつきあいながら、言葉はどこから来るのだろう、という思いにかられた。

「（頭の中に文字が）あるんだけれど、それが言えない」という。頭の中の引き出しを手でかき回して探しているような顔をしている。しばらく待つ。もっと待つ。「うん、またにしよう」と母が言う。探し物はなかなか簡単には見つからない。

四人部屋の住人は、顔や口、頭に怪我を負った人々。「つらいね」と言いつつも笑いの絶えない病室で、母も少しずつ笑顔を取り戻していった。

「お名前は？　ここはどこですか？　お年は？」という質問が、回診の度に繰り返される。絞り出すような答や、とんちんかんな答が飛び出す。

看護婦さんが去った後、前のベッドのおばさんがつぶやく。「普通に、何ということもない話をしてるといいんだよ。そうするとスラスラって話せるんだよね」母も笑いながら「緊張すると言えなくなっちゃう」と相づちを打つ。

絵と文　宮里暁美（目黒区ふどう幼稚園）

耳をすまして

母の隣のベッドには、頭の手術をしたおばあちゃんがいた。ぼんやりとして、ほとんど話もしなかった。

そのおばあちゃんのところに、幼なじみの男性がお見舞いに来た。とたんに、おばあちゃんは「あらやだ、きまりわるい」と大きな声で言った。そして、ずいぶん長い時間うれしそうに話をしていた。田舎で一人暮らしをしていて倒れたというおばあちゃんだったが、気丈に一人暮らしをしている様子が見えるような気がした。

緊張すると話せなくなる母、知らない人に囲まれていると一言も話せないおばあちゃん、でも、場面が変われば全く違う姿になる。言葉はどこから来るのだろう？

リハビリにつきあい、食事の手伝いをして、それでも心配で去りがたい気持ちの私に、母が、また何か言おうとする。待つ、ゆっくり待つ。「あ、」という顔になる。「何？」と聞くと、「すみやかに行きなさい」と言った。

母の言葉に、耳をすます。

母の言葉が、母という体と心を通り抜け、外界に出てくるのを、私はゆっくりと待っている。

私が幼児教育を志した頃(13)

津守　真

アメリカの中産階級

一九五二年二月二十四日、私は次のひと月を過ごすホワイト家に移った。

途中の自動車のなかで、ハワード・ホワイト氏は何度も言った。「私たちは平凡な中産階級で、私たちの教会の人たちは勤労者ばかりだから、あなたもじきに私たちを好きになるでしょう。それから、心得ておいてほしいが、私たちには子どもが二人いる。二人とも実子ではない。六年前に州の児童相談所を通して全然知らない家からもらった。児童相談所は親の経済状態、教育程度、希望などを検討して養子縁組をきめる。私の家はそれに合格した。姉のドリーンは九歳、弟のウエスは五歳で、実のきょうだいだった。ふたりとも

もう大きかったから、自分でもよく知っていて、私たちのことを、パパ、ママ、と呼んでいる。」とホワイト氏は誇らしげに言った。私がこの家に泊まっていたときはドリーンは十五歳、ウエスは十一歳である。

ホワイト氏夫妻はいずれも五十歳を少し越えた年配で、ホワイト氏は歯科技工士をしている典型的な勤労階級である。夫妻とも教育程度は高くないが、極めて好人物であることが一目で分かる。ホワイト氏はずんぐりと太って、快活で屈託がない。電気をいじったり大工仕事を好む。本は殆ど読まないが、実直な職人である。夫妻とも貧しい家庭の出で、若いときから貧乏と戦ってきたと話す。ホワイト夫人の両親はスエーデンからの移民である。ホワイト夫人は稀にみる宗教的な人であった。

ホワイト家の生活

今度の家は今までと対照的で、マッチ箱のような小さな可愛らしい家である。夫婦の寝室と、二階に子ども部屋がふたつあるだけである。私はウエスの部屋に同居し、ダブルベッドでウエスと一緒に寝ることになった。ウエスも私も寝相がわるいので、夜中によく目が覚めた。一週間ほど後に、ウエスは床に寝て、私にベッドを譲ってくれた。それでもウエスは私と同室になることを大喜びして、当座の二、三日は私のベッドまで作ってくれて、私に愛敬をふりまいた。ウエスはすっかり私のことを尊敬しているのでおかしくなる位だった。朝起きると、私の前で直立不動の姿勢をとって、「あなたには素敵な奥さんが

いるんだね」と言った。昨夜机の上に婚約者の写真を飾ってあるのを見ていた。学校中に私のことを言いふらし、翌日には近所の学校友達が私を見に来た。夜はまた、近所の高校生が私たちの部屋に来た。この家の人たちは教育はないが、愛情と善意に満ちている。

毎朝、ドリーンとウエス、ホワイト氏と一緒に食卓で朝の祈りをしてから朝食を食べる。夫人は皆のサービスに忙しいが、祈りのときは食卓に加わる。朝はコンフレーキに、卵とベーコンであることは他の家庭と同様である。食事が終わるとそれぞれに飛び出してゆく。私は食後の片付けを手伝いながら、夫人とおしゃべりをした。ホワイト夫人は、「神様がこの子たちを私たちに与えてくださって、なんて幸せなんでしょう。この子たちは私のエンジェルです」と朝食を用意しながら何度も言った。「神は愛ですよね、そう思いませんか?」子どもたちはこの言葉に閉口しているみたいであった。私もときどきなんて単純なんだろうと思ってしまった。いま思えばホワイト夫人の言ったように、こう思うことによってこの家庭は皆がひとつになれたのである。

ウエスはどこか落ち着きのない子どもである。学校から帰るとすぐにテレビに飛びついて夜寝るまではなれなかった。当時日本にはまだテレビはなくて、私はアメリカに来るまでテレビを見たことはなかった。最初のうちは私も一緒に見ていたが、彼が見る番組はカウボーイのピストルの撃ち合いで、これは平和の思想に反すると思った。テレビが食後の会話の時間を占領してしまうこともあった。ウエスは学校の成績もよくない。ドリーンは中学三年だが、美貌で、ボーイフレンドがいた。ホワイト夫人はこのことも心配してい

た。

里親と里子

ある晩、教会の集会からの帰途、自動車の中で話が二人の子どもたちのことに移った。ホワイト夫妻は熱をこめて話し始めた。ドリーンが生れたのは母親が十四歳のときだった。父親は海軍の提督の息子で、息子に厳しかった。息子は素行がおさまらず、酒場を飲み歩いていた。親の反対を押し切って結婚し、次々に子どもが生れた。ドリーンを筆頭に六人の子どもがいたにもかかわらず、ますます酒癖がひどくなり、数年前に別の女ができて、ドリーンの母は捨てられた。いまは刑務所にいるとのことだった。ホワイト夫妻がこの子たちを引き取ったとき、ウエスはいじけきっていて、夫妻を上目づかいに見て、一言も口をきかなかったというし、来た当座は金を盗んだり、万引きしたりした。ドリーンは泣いてばかりいた。実の母親を慕っている様子も見えるので、親元に帰したほうがいいのではないかと考えたこともあったが、惨めな生活になることが目に見えているので、自分たちで育てようと決意した。いまふたりともだれが見ても実の親子である。始めから知っている友人たちは、よくここまで来たと感心している。笑いながらしゃべっているこの子たちには、暗い過去があったとは思えない。二人の子どもたちは、養父母に従ってゆくのが最善の道であることを知っている。児童相談所は実の親には会わせない方針であるが、ホワイト夫人は、子どもたちが成人したら、親に会わせようと思っている。

しゃべっているうちに、私たちはガレージの中の冷えきった自動車にいることに気がついた。外は雪が一面にふりしきって、零下十度の寒さである。家の中に入って温かいコーヒーを夫妻と一緒に飲みながら、だれにでも温かい家庭が必要であることを思った。里子を育てるには人一倍の苦労がいるだろう。けれども育て育つうちに愛情がかわされて、ホワイト夫妻はもうこの子たちがいなければとても寂しくて生きてゆけないと言う。夫妻は経済的に余裕があるわけではない。昨年から自動車が故障していても修理に出せないでいる人たちである。この子たちはなんとしても育てるのだと言う。ドリーンのボーイフレンドは数カ月前にドリーンを構わなくなってしまった。まだ十五歳なのに五歳も年上の男の子とそんなに親しくしては心配でたまらなかったホワイト夫人はドリーンが悲観しているのを見ると、今度はかわいそうでたまらなくなるのである。ウエスも最近は休日というとお金をもらって一人で映画をみにゆく。これも夫人の悩みの種である。私はこんな家の家族の一員になった。

ホワイト家の台所には、始終近所の人がおしゃべりに来ていた。私はしばしばそれに加わった。ホワイト夫人はおしゃべりのあとには、「神様がこの子たちを私たちに与えてくださって、私はなんて幸せなんでしょう。神は愛ですよね。」ときっと付け加えた。

今日は驚くべき話を夫人から聞いた。新聞で五つ子の誕生の記事を読んだとき、ドリーンは、どうして五人もいちどきに赤ん坊が生れるのかと尋ねた。こんなことはめったにないと説明したらドリーンは急に泣き出した。訳を聞いたら自分の母は、数年前に赤ん坊が

生れた。そのときにだれも赤ん坊を生むのを助ける人がなくて、ドリーンが出産を助けた。それで、五人もいちどきに赤ん坊が生れたら、いったいどうするのだろうという質問だった。これがドリーンの九歳のときだった。

この話を終えて、夫人は次のように話した。「現代の世界ではだれも一人で生きることはできませんね。だれひとり同じ性格の人はいないけれど、だれでも幸福に生きる権利をもっています。だれひとり捨てられてはなりません。だれでも人間として尊敬される権利をもっています。だれでもその人にふさわしく世の中に貢献する道があります。」学歴はなくても最も教養のある人の言葉である。これは私が現在付け加えたのではなく、私の日記からの引用である。アメリカの中産階級には、その当時すでにこういうスピリットがあった。

アメリカの大学生活

一方、私自身はどうかと言えば、大学の勉強が本格的に忙しくなってきた。当時のアメリカの大学は知識のデパートのようなもので、試験に合格するためには考える暇なしに、文献と専門書を読まなければならなかった。

異国にいると、日本の田園風景が懐かしくなるのは多分どの時代にも留学生の常であろう。私も藁葺き屋根や段々畑、蝉の鳴き声、地引網などの日本の田舎の風景を懐って心が疼いた。五十年前にはどこにもあった日本の自然と共にある生活の余裕であった。アメリ

カ人には当分の間日本の良さは分からないだろうと思い、それが理解されるようになる前に、日本の風景が壊れてしまうのではないかと異国にあって恐れた。児童研究についても、子どもの心を汲むだけの余裕がなくて何の発達心理学があるものか。何の児童教育があるものかと私はお茶大の幼稚園を懐かしく思った。私は「静まりて我の神たるを知れ。」という聖書の言葉を思った。

私が勉強していた児童研究所は、発達心理学が主流だったから、幼児教育やナースリースクールの実習をとる学生は少なかった。ナースリースクールの主任、ミス・ヘッドリーは、当時全米の幼児教育界で一番力のあったＡＣＥＩ（国際幼児教育協会）のリーダーだった。（ミス・ヘッドリーの著書は後に『幼稚園』と題して日本語に翻訳された。）幼児教育の講義は、Dr.E.M.フラーの担当で、学生は数人しかいなかったので、ごくインフォーマルに進められ、私は日本の幼稚園の紹介で倉橋惣三の『育ての心』の詩を翻訳して話したが、私の英語の拙さもあって、あまり関心をもたれなかった。

アメリカ人には世界を股にかけて飛び回る可能性が開けていたが、当時の日本人にはそれが閉ざされていた。国際と言えば、外国の新しい知識をいち早く知る窓口というような認識で、外国から言えば、日本に何かを学ぶものがあるとは思われていなかった。

私はレポートを書くのに、ホワイト家にはタイプライターがないので、前に泊まっていたW家にしばしばタイプライターを打ちに行った。ある晩W家から帰ってきたら、ホワイト氏の妹が十八歳の娘と婚約者を連れて来ていた。婚約者の十九歳の青年は今度軍隊にい

かねばならず、兵役は四年間だと顔を曇らせた。私は日本は戦争に負けたおかげで兵役の途中で軍隊から解放されたことを話すと、青年は羨んだ。

少女の笑顔

私の指導教官、Dr.ハリスは、私が日本で知恵遅れの幼児のグループを開いていたことを知っていて、三月の休みの間に行くようにと、ミネソタ州南部のオワターナの学校を紹介された。三月二十三日から四日間の予定で私ははじめてバス旅行をすることになった。私は父がかつて米国に留学したときに使った大きくて頑丈なトランクしか持っていなかったので、手ごろな鞄がなくて困っていると、ドリーンが自分のスーツケースを貸してくれた。「あたしはあなたの役に立って嬉しい」と言って喜んだ。このときのドリーンの美しい笑顔を私は忘れることができない。

長い年月の間に

私の壮年期は、まだ日本人が外国に行くのは大変な時代で、殊に私の子どもたちが小さい頃は、私がアメリカに行くことなど考えられもしなかった。私がアメリカにその次に行ったのは、二十年後の一九七一年だった。私のためのレセプションが、ホワイト家で開かれたとき、料理が好きなホワイト夫人は何日もかけて大御馳走を作ってくれた。ホワイト氏はすでに健康を害して、首が痛いと私に訴えた。そのときにはドリーンもウエスもホ

ワイト家を離れ、結婚して子どもがいたという話だがすでに離婚していた。その年の暮、ホワイト夫人から夫妻で一緒に撮った写真が送られてきた。その裏には夫人の自筆で、「ハワード、何と美しい顔でしょう。エンジェルのようです。私の夫は恍惚の人になろうとしています」と記されていた。三回目に行ったのは一九七四年で、ホワイト氏はすでに亡く、夫人がひとりだった。壁にかけた楕円の額縁にいれた家族の写真を夫人は両手で撫でた。私は胸が熱くなった。四回目に行ったのは一九八五年だった。市の北のはずれの小さな家に、ドリーンが離婚した最初の夫とその奥さんがホワイト夫人を引き取って面倒をみていた。夫人はソファにすわったきりで、皆は彼女の記憶は失われて何も分からないと言った。だれが話しかけても、ホワイト夫人は首を振るだけだったが、私は彼女はすべてを了解していると思った。私と妻は、夫人には恐らく最後になるだろう別れのキスをして帰途についた。それから間もなくミネアポリスの友人から新聞の死亡記事が送られてきた。「リリアン・ホワイト　享年八十三歳。月曜日午後二時三十分より記念礼拝。ウオッシュバーン・マクレヴィ・スウオンセン・チャペルにて」と記されていた。

ドリーンとウエスがいまどうしているのかは分からない。しかし、私にははっきりと確信できることがある。この子たちは、あの信仰深く献身的な養い親を決して忘れることはなく、たとえ現在が困難な境遇にあったとしても、あの頃を思い出すときには心に安らぎを覚えているに違いないということである。いま私があの子たちに会ったとしたら、成長期のあのひとときの幸せは一生涯の心の支えになっていると、共に語り合えるだろう。

付け足し

ちょうどこの原稿を書いているとき、十八年前に私が現場の保育者になって最初の日に出会ったH夫の家族が学校に訪ねてきた。アメリカに移住して十数年になるが、一月程日本に帰って来たのである。H夫のことは『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）の第1章1「子どもがはじめた小さなことに目をとめる」、第7章1―2「再会」及び『子どもの世界をどうみるか』（NHKブックス）のⅡ―1「理解できない子どもの行為をもちこたえる」に記した。一九九二年にアリゾナで開かれたOMEP世界大会の際に私共がサンフランシスコの家を訪ねて以来、八年ぶりである。私を見るなり、H夫は、天井に頭が届くくらい飛び跳ねて喜んだ。この子はアメリカにいても毎日私の写真を見て私の名を呼んでいるのだと、両親といまは大学生になった弟たちがこもごも話してくれた。私は保育者の有難さを思った。子どもは成長期の危機を共にしてくれた人をいつも心に留めているが、そのことが保育者に伝えられることは稀である。

幼児期に幸福に過ごした日々の記憶は、生涯にわたって心の支えになる。幼児教育の成果は、後の時期の成功の度合によって測れるのではない。幼児期にあるときの一日が満ち足りた一日であるかどうかが常に保育者に問われている。

子どものいる暮らし――男・夫・父

暮らしの中で
子どもを観る私と私を観る子ども

安見　克夫

ある時代に育った自分

二十一世紀を新しい時代と言うならば二十世紀は古き時代と言うのかもしれない。

私の今を創りだした時代は、二十世紀の古き時代の中の新しい時代であったように思う。

その古き時代の中の新しい時代とは、戦前の古き時代から戦後の力強い復興に向けた、社会、教育、文化を核とした暮らしのことであり自分に強い影響を与えた時代でもある。

戦後の新しい時代の中で、私自身が「新しい時代の幕開け」と感じたことは、昭和三十九年の東京オリンピックの開催に伴い、高速道路や新幹線が整備され、それと同時に日本に始めて上陸したコーラやハンバーガー、そしてグレープフルーツなどとの初めての出会いである。それは、日本にとって急速な社会変化を告げる時代の幕開けの象徴であった。その中で多くの大人たちは、次々と新しい時代を切り

拓き、その職業を目指して群がっていった。こうした激動の中で生きる私の父の姿は、何事にも厳格で、責任や義務といったことを一徹に貫く人で、とにかく「厳しく怖い人」といった印象が強かった。

しかし、こうした反面とても家族思いで、当時の唯一の娯楽であった映画を「ニュース映画館」でよく見たものである。そして帰りには決まってラーメンか屋台のおでんを食べたことが子ども心に記憶にある。また夏になると家族で祖母をつれて毎年海に連れていってもらったことなどはとても鮮明に覚えている。こうした父の優しさや厳しさを感じ感化されながら自分という価値を見出してきたように思える。つまり自分の男としての存在は、父を中心とした家族と過ごした幼年期の生活そのものの中で育ち得たことが大きいと思う。

わが子の中に生きる自分

私は、結婚して長女が生まれると共に無意識ではあるが何か心の中に私なりの変化が表れてきているような気がした。それは、子どもに見られていく自分の姿と自分自身が家族を支えていく責任の重さを次第に感じはじめていたことであるような気がする。そして、さらに子どもを中心とした生活圏が広がり家族社会と接する機会も次第に多くなり、よその同じぐらいの子を持つ親の姿が気になってしかたがなかった。

こうした中で妻は、夜、夜中に起きミルクを与え、離乳食を作り、風呂に入れ不眠不休の毎日が続く。妻の我が子への献身的な育てを見ていると私の面倒を見る上に我が子を育てる姿に頭の下がる思いがする。そして、その時々で自分のできることを探し手助けし、ある時は互いに役割りながら必死に生活してきた。

そして子どもを中心とする生活の中で、今まで経験したことのない出会いが沢山あり、殆ど興味を持たなかった遊園地やレジャー施設での遊び、そして

広々とした公園でのゲームなど、家族で過ごす機会も次第と多くなった。時に私も童心になって楽しむことが多くなり新たな生活スタイルを築いていくこととなった。

こうした新たな生活の中で子どもはそれなりに私を価値づけていくのだと思う。

ある日、私がことあるごとに口癖である「忙しくて大変だ、大変だ」と妻にこぼした時、八歳の長女は、それを聞いて私にこう言ったのである。

「お父さんって、大変だ大変だと言いながらも結局は、自分が好きでやっていることでしょう」ときっぱりと言われた私はあまりの驚きに声も出なかったのである。

いつまでも、子ども（幼児）だと思っていた我が子の成長を実感すると共に人のことをよく見ているものだと感心させられた。

また、ある日、長女が学校からニコニコしながら帰宅した時のこと、妻は私に長女が「自分でお父さんに報告したい」と言っていたので聞いて上げてほしいというのである。

何があったのかと思うと、長女は誇らしげに学校のテストの結果を私に直接教えてくれた。自分が頑張ったことを自分の口で私に言いたかったのである。私はそのことの意味を大切にしたいと思った。それは、長女にとって父の存在感がかなり大きな物として受け止められているからである。子どもたちは共に喜び合ったり、叱られたり、勇気づけられたり、時にしっかり守られたりしながら、父としての私という存在を価値づけていくのだと感じた。

私という中で生きる子ども

子どもは、いつまでも子どもであるに違いはないのだが、私は常日頃から自分に言い聞かせて来たことがある。人は、この世に生を授かった時から、人ということであり、そこにはその人の生き方と人格があることを認めてあげなくてはならないというこ

とである。

ある出来事が私を変えた。長女がまだ乳母車に乗っていたころに子どもが眠くなり人混みの中で泣きわめくことがよくあった時のことである。

私は父親として強い口調で必死に泣きやませようとした。父であることを強く押しつけ、自分に従わせることを暗に求めて泣きわめく我が子を一生懸命泣き止ませることばかり考え、我が子の心の内を受け止められなかった自分を今歯がゆく思うのである。あのころのことを思うといつも心が痛み、子どもを一人の人としてしっかり認めて行かなくてはと思うのである。

ところで我が家は十二歳と十歳の姉妹と牝の小型犬一匹と暮らしている。

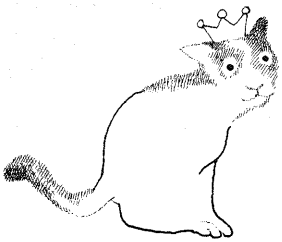
私を除けば全て女である。この姉妹の暮らしを見ていると自分の子どもでありながら実に滑稽に見える時がある。

それは、長女は何もかも母親に、そして次女は、私によく似ていることである。

その関係は、私と妻との関係のように、次女が長女にあれやこれやと口やかましく話すのである。それは夫婦の小型版のようである。だが私の役割をしている次女の口調は、妻の口調にそっくりなところがおもしろい。つまり、知らぬ間に我が夫婦の心が子どもにリストアされていくのである。

数年前、我が家で犬を飼いたいということで騒動が起きた。

家族会議が連日続き、相も変わらず次女が私の代わりを努めるように仕切るのである。そして最後の決断の日子ども達と妻は、お父さんが決めることにしようと言うのである。つまり、子ども達から見れば、最終の決定権は、父がもつものであると感じてい



るようである。そして、我が家に牝のかわいい子犬がやってきた。子犬の名前を付けることになった時、妻と子ども達は、自分達で決めると言いだし「シェル」と言う名前をつけた。つまり、犬を飼うという大きな出来事は父として、また、名前を付けるといったことは、父の存在感より、自分達という存在を感じているようである。しかし、大きな荷物や大工仕事やスポーツなどに対しては、父と言うより一人の男の人として存在を感じている事が多いようである。

つまり、事の大きさや重大さなどによって、子どもはすでに、父として、男として、夫としての存在感を無意識ではあるがその時々で感じ分けているように思う。

家族の中での私

子ども達が寝静まる頃、夕食の後かたづけが終わる妻と私はダイニングで一時の時間をコーヒーブレイクをすることがよくある。

子どものことや旅行のこと、先々の人生のこと、そして進学のことなど話し合わなければならないことがたくさんあるからである。すると次女がそっとやってきて、今日もラブラブーと入ってくる。妻が「そうよ、いいでしょー」と言うと照れ笑いしながら、「私にも飲み物頂戴」と割り込んでくるのである。

そして時に、妻と私が意見の相違から口論することもある。そんなとき、お父さんの意見が正しいとかお母さんの意見が正しいとかと二人の子どもが仲裁し裁定してくれることがよくある。

口論の話題が子どもを巻き込む話の時は、両親としての関係の中に子どもとして割り込んでくるが仕事や将来のことなど夫婦の関係の口論となると話の中には決して入ろうとしないことが多いようである。

私は、子どもなりにそのへんを無意識に使いわけているのではないかと思うが、そして私自身も、その

時々の立場で無意識に使い分けているのだと思う。

そうなると、自分自身の存在感は、子どもにとってかなり大きなものであり強い影響を及ぼしている事になる。であるならば、私は、私という成り立ちに気付いて行かなくてはならないのかもしれない。

我が子が感じる心

小さい時から子どもが着る服はなるべく子どもに選ばせていた。それは成長と共にそれぞれの個性が表れて来るからである。長女は、ワイルドな服装を好み、次女は、さわかやなブルー系の明るい服装を好むが、最近は外出する時、自分でコーディネートしその時の気分や行き先に合わせた服装を私に見せてくれる。

私がじっと見つめると、「何、そんなにじろじろ見るのよ」と恥ずかしげな顔を見せる。一瞬そんな時、父親であり、かつ異性から見られている複雑な気持を感じるのかもしれない。ともあれ、私自身も子どもからの一言一言によって大きく成長させられていることに気づくのである。

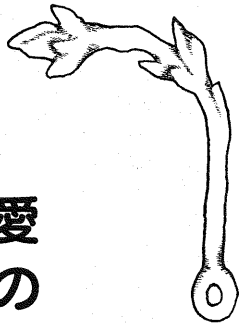
いま、家族の中での父親の役割が問いただされているが、私自身、親父の姿から学び得た、楽しかったことを父親として、子どもにたくさんしてあげたいと思っている。

そして、今まで、経験してきた嫌なことは、子どもに押しつけないよう心掛けているつもりであるが、周囲から言わせると、最近親父にそっくりだそうである。父親としての存在感が強ければ強いほど、子どもを縛ることになるから、その時々で、その立場にたって受け止めてあげられる存在でいることの方が大切な気がしている。

とにかく今は、健康で明るく互いの繋がりを大切にできる平凡な家族でありたいと考えている我が家である。

（板橋富士見幼稚園）

☆このシリーズは、今回で終わります。



子どもの本から

愛の祭り　イースター

大沢　啓子

若い頃、一人暮らしをしてみたいと思ったことがありましたが、結局そのチャンスもなく五十歳を越してしまいました。結婚するまでは両親のもとで姉と共に育ち、結婚してからは夫とその家族が一緒にいました。今は子ども達が生まれ育ち、私の家族ができ上がっています。

一人暮らしは気楽で良いと思っている人もたくさんいるとは思いますが……、この主人公のうさぎはそうは思わなかったようです。

ある朝、うさぎは大きなニレの木の下で目を覚まし、友だちがほしくなりました。静まり返った森の中、あたりには若葉や花が咲きそろい、木々の間か

らは明るい陽の光がさしこんでいます。うさぎの新しい朝はこんなに美しく、光に満ちているのに、何か足りないようです。友だちになってくれるうさぎがいないのです。どこかにうさぎはいないかなと、ニレの枝でねむそうにしているふくろうに聞いてみると、「イースターはうさぎだらけじゃないか」という答えがかえってきました。謎のようなふくろうの言葉にさそわれ、うさぎの旅が始まります。

イースターって何？　イースターってどこ？　うさぎはイースターを探せばそこに友だちがいると考えました。それはきっとイースト（東）の方だろうと思い東に向かって歩きだしたのですが、どこまで行っても見つかりません。穏やかな日ばかりではありません。嵐の日の落ち葉の中も、冷たい雪の山道も、うさぎのつらい孤独な旅は延々と続きます。

頁をめくっていくと、やさしいパステル調の絵が広がり、この美しい自然の中で旅を続けるあいだ、

◀『うさぎの　だいじな　みつけもの』
シャーロット・ゾロトウ作　ヘレン・クレイグ絵
松井るり子訳　ほるぷ出版　一九九八年

一人ぼっちのうさぎを応援するものの存在に気づきます。画面の初めから終わりまで、お供のようにねずみが一匹ついてきます。さらに、あたりには草花が咲きほこり、池には美しいマスが銀のうろこを光らせています。ヒナギクやマルハナバチ、小鳥たちも飛んでいます。雪の降る山道でさえもキツネやクマ、のねずみたちがうさぎを見守ってくれているのです。これらの動物や植物は読み手の気持ちをまきこんで、そっとうさぎを励ましているようです。

こんなにたくさんの動物や植物に囲まれているのに、なぜ彼はそのことに気づきもせず、同じ「うさぎ」にこだわるのでしょう。満たされないうさぎの気持ちは、やはり気になります。彼の探しているイースターとは何なのでしょう。

イースターはキリスト教の〝復活祭〟のことで、キリストが処刑され、その後この世に復活したことを祝う日で、冬のクリスマスと並ぶキリスト教のお祭りです。

またこの言葉は、ドイツ語でオステルン、古くは北欧神話の光と春の女神オステラに由来し、昔からゲルマンではこの時期に春を迎えるお祭りを行ってきました。

そしてユダヤ教ではこの日を〝過越祭〟として祝います。旧約聖書の出エジプト記にその話があります。ユダヤの民がモーゼによってエジプトから解放される前の晩、神の怒りで国中の長男が殺されることとなりましたが、羊の血を戸口に塗って印した家だけは過ぎ越していき、ユダヤの民の子どもの命が助かったというものです。過越祭は神の怒りを過ぎ越した喜びと民の解放の記念という二重のお祝いなのです。

この三つのお祭りが重なってイースターは世界の広い地域で春の祭典として盛大に行われていますが、どれにも共通することは「命のつながり」とい

うことです。北欧の冬、あらゆる生き物は死に絶えたと思われるほどの厳寒の山野にも、春の訪れにより草木や花が芽生え、新しい命が生まれる。何代にもわたった奴隷生活からの解放と、抹殺されるはずだった子ども達の命が救われ、民族の存続が新たに約束された。そして十字架にかけられ処刑されたはずのイエス・キリストの復活。どれも〝死〟を乗り越え次の命へとつながる喜びが祭となっているのです。

こう考えると、うさぎが「うさぎ」にこだわってイースターを探すのもうなずけます。明るい色調で細かいところまでユーモラスな絵からは深刻さはうかがえませんが、彼の旅もきっとつらい孤独な旅だったのでしょう。

ついにうさぎはめすのうさぎとめぐりあうことができ、二匹はニレの木の下にもどりました。そして間もなくたくさんの子うさぎが生まれ、フクロウの言葉通りイースターはうさぎだらけになったのです。うさぎにとってイースターを探しあてることは未来へ命をつなぐ喜びをみつけること、家族の愛を育んでいくことだったのです。

ゾロトウのこの本は一九五九年、アメリカで出版されていますが、四十年経ったいま、クレイグの新しいイラストで再出版されました。この半世紀の間に家族や結婚の考え方は大きく変わりました。しかしいつまでも途切れることのない命と愛の問題は普遍です。人は一人で生きてきたのではなく、友を求め、伴侶を求め、家族が生まれ脈々と命をつないで歴史を作ってきたのです。クレイグの優しい絵は、ゾロトウのなげかけたこの大きな愛の問題を暖かいユーモアでつつみ、読み手に伝えています。

（舞々同人）

編集後記

四月に入園した三歳児が、園庭の隅の小さな池で水遊びをするのを見ました。七月の上旬のことで、まわりを石で固めた小さな池に水が入っているのを見たのは初めてでした。

滝のような水の落ちる音と人が集まり始めている気配に気づいて近寄っていくと、その辺りの気分はもうプールサイドです。ゴザ、足ふきタオル、すのこなどがおかれ、先生は裸足になっていました。集まって来た子ども達も見様見真似で靴と靴下を脱ぎ、池に近づきます。ところが、流れ落ちる水の音とちょろちょろと少しずつたまり始めた池を前にして、最初の一歩がでません。誰からともなく、石づたいに歌いながら池を回り始めます。まるで宝を前にした山賊のようです。やがてその輪もくずれ、流れと一緒に走ったり、水源を見たりしていました。

十分程が過ぎ、やっと池に入る子が出始めました。無造作にスコップで水を放り出す子、足でパシャパシャして楽しむ子、滝の水を溜めて〝おいしい水はいかがですか〟と注ぐ子、ついには、たかばいで這い回る子も数人見られました。

水と三歳児の思い思いの戯れは途切れることなく、次々と新しい遊びが始まり伝わります。たかが踝までもない水に寄せる熱中ぶりに、私は不思議になります。そして、大袈裟に思われたあの準備が、園庭での新鮮な水との出会いの準備だったのだと、やっと気づきました。（A）

幼児の教育

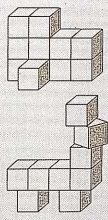
第九十九巻　第十一号
（二〇〇〇年十一月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十二年十一月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベルの
恩物であそぼう



最新刊

フレーベルが創案した恩物とは、単純な素材を使い、楽しく遊べる総合的な教育遊具です。その第1恩物から第10恩物までの特徴と使い方を、写真と図版を多用して楽しく紹介。初めて恩物を扱う人にも、その具体的作品の数々が理解の手助けを容易にしてくれます。

玉成恩物研究会／編著

B5判・128頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

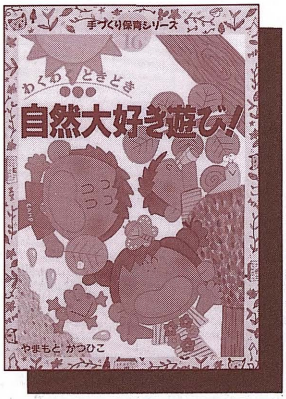
幼児の教育　第九十九巻　第十一号　平成十二年十一月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

手づくり保育シリーズ

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈るシリーズ。不得手な先生でも子どもたちといっしょに楽しみながら作ったり遊べるのがチャームポイント。

最新刊

手づくり保育シリーズ⑯
わくわくどきどき自然大好き遊び！



「自然と遊ぶ」「自然に遊ぶ」今の子どもたちに求められているこの二つのポイントにおいて、自然の中で、豊かな感性を育てる遊び、わくわくどきどきする遊びを紹介。特別な準備を必要とせず、簡単に遊べて、楽しみながら自然への目や愛の心が育ちます。救急ワンポイントレッスン付。

やまもと　かつひこ／著

B5判・96頁・定価：本体2,200円＋税

手づくり保育シリーズ⑰
からだも心もはずませて友だちと遊ぼう

最新刊

子どもたちの遊びを豊かにする多彩なジャンケン遊びと、ゆかいなオニごっこの数々を、イラストを豊富にまじえて多数紹介します。本書の遊びを通じ、子ども自ら創造する力、仲間と連帯して遊びを発展させる心、未知の遊びに挑戦する気持ちを養えるよう願っています。

菅原道彦／著

B5判・96頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。